平成28年3月

正井三枝子　学位論文審査要旨

主　査　　吉　岡　伸　一
副主査　　前　垣　義　弘
同　　兼　子　幸　一

主論文

Residual symptoms were differentially associated with brain function in remitted patients with major depressive disorders

（寛解状態の大うつ病患者において、残遺症状は異なる脳領域の機能障害と関係する）

（著者：正井三枝子、朴盛弘、横山勝利、松村博史、山梨豪彦、板倉征史、杉江拓也、三浦明彦、長田泉美、岩田正明、兼子幸一）

平成28年　Yonago Acta medica　59巻　15頁～23頁

参考論文

1. 辺縁系脳炎の精神症状、せん妄にblonanserinが奏功した症例

（著者：井上郁、横山勝利、正井三枝子、兼子幸一）

平成28年　最新精神医学　掲載予定

学　位　論　文　要　旨

Residual symptoms were differentially associated with brain function in remitted patients with major depressive disorders

（寛解状態の大うつ病患者において、残遺症状は異なる脳領域の機能障害と関係する）

大うつ病の望ましい治療目標は、症状の寛解及び病前の社会機能水準への回復の両方を達成することにある。症状寛解は、しばしば標準的な症状評価スケールの得点で定義されてきたが、この定義によれば寛解状態にあっても複数の残遺症状が存在しうることになる。本研究の目的は、大うつ病の残遺症状と社会機能及び脳機能との関係を明らかにすることにある。

方　法

主治医評価によるハミルトンうつ病評価尺度17項目(HAM-D17)の総得点が7点以下と操作的に定義した寛解を満たす外来加療中の大うつ病患者21名を対象者とした。抑うつ症状の評価は抑うつ状態自己評価尺度(CES-D)、社会機能の評価は社会適応度評価尺度(SASS)をそれぞれ用いて患者自身による主観的評価を行うとともに、主治医が機能の全体的評定尺度(GAF)の評価を行った。脳機能に関しては、近赤外線スペクトロスコピー(NIRS)用いて、認知機能課題である言語流暢課題施行中の前頭及び側頭皮質領域において酸素化ヘモグロビン変化量を指標として測定した。

結　果

対象群のCES-D総得点平均値は18.0点(SD=13.2)であり、軽度うつ状態にあることが示された。CES-D総得点及び4つの下位因子の得点は、すべてSASS総得点と統計的に有意な負の相関(Spearman順位相関)を示した。4つの下位因子中、「対人関係因子」および「身体症状因子」がSASS総得点と最も強い相関を示した。また、「対人因子」は他覚的な社会機能評価尺度GAFとも強い負の相関を示した。脳機能との関連では、CES-D総得点及び3つの下位因子「抑うつ気分因子」、「身体症状因子」、「ポジティブ感情因子」が、主に左半球での平均酸素化ヘモグロビン変化量と有意な負の相関を示したのに対して、「対人関係因子」は右前頭前皮質領域で有意な正の相関を示した。

考　察

操作的定義に基づく寛解状態に至っても、大うつ病患者は残遺症状を呈する可能性があること、また、これらの残遺症状の中では対人関係での過敏性が特に社会機能障害と強く関連することが明らかになった。残遺症状の病態生理としては、語流暢課題施行中の脳血液量変化を脳機能の指標とする場合、対人関係の過敏性には主に右前頭前皮質の脱活性化の障害が、抑うつ気分や身体症状には主に右側頭皮質領域の活性化の障害が、それぞれ関係する可能性が示唆された。

結　論

寛解状態にあっても大うつ病患者は残遺症状を呈する可能性があるとともに、この残遺症状は社会機能障害と強い関連を示した。残遺症状と脳機能の関連では、対人関係の過敏性は右前頭前皮質と、抑うつ気分や身体症状は左側頭皮質とそれぞれ関連する可能性が示唆された。